

# 自己意識と生

——ヘーゲル『精神現象学』における精神の基礎をめぐって——

嶺 岸 佑 亮

## 序

自己意識は、近代哲学の根本主題の一つである。〈私は私である〉ということ、このことをめぐってさまざまな思索家たちが議論してきたのであった。その中でも、ヘーゲルの『精神現象学 (*Phänomenologie des Geistes*)』(1807年)における自己意識の理論はきわめて独自の位置を占める。というのも、ヘーゲルが同書で提示するところによれば、自己意識は純然たる一個人のありようを意味するだけにとどまらず、より広い領域を含み込んだかたちで理解されるべきであるからである。すなわちそれによれば、ひとが自己意識的であるのは、別の自己意識に向き合うことによってである。そのことによって始めて、ひとは本当の意味で〈私は私である〉ようになる、というのである。このようにみる場合、自己意識は個別的なものであるとともに、その本質からして他者との関係のうちにあると理解される。それもただ関係するということではない。のみならず、さまざまな自己意識は同じ一つの統一のもとに属しており、そのことによって普遍的であるとされる。

『精神現象学』の第4章である「IV. 自ら自身の確信の真理 (Die Wahrheit der Gewissheit seiner selbst)」の叙述は、自己意識をめぐるこうした独特な事態についてきわめて示唆に富んでおり、豊かな洞察を与えてくれる。すなわちそれは、ひとが自ら自身の何であるかについて思いを深め、自覚的となり、本当の意味で他のいかなるものでもない〈個〉として存在するのはどのようにしてであるかという、その成立について光を当ててくれる。ヘーゲルによれば、「自己意識 (*das Selbstbewusstsein*)」は「意識 (*das Bewusstsein*)」から発展するようにして登場する。ひとは自らを取り巻く周囲にあるような外的な対象へと向かっていたのから立ち返って、自ら自身を振り返るようになる、というわけである。その意味からすれば、〈私は私である〉ということは、活動性を含

み込んだものであることが分かる。こうした活動性はさらに、別の自己意識との関係へと向かう。自己意識が別の自己意識に関係し、互いが互いを認め合うということを通じてこそ、ひとは本当の意味で〈個〉として存在するようになり、「個性性 (die Individualität)」を確立する。こうした過程が「自ら自身の確信の真理」章から次の章である「理性の確信と真理 (Gewissheit und Wahrheit der Vernunft)」にかけて論じられる。またその一方で、「個性性」の確立は同時に、自己意識どうしの統一が「精神 (der Geist)」に帰着することを指し示す。このようみるならば、『精神現象学』における自己意識の特徴をその本質から理解することは、同書の核となるとともにヘーゲル哲学の根本主題である、「精神」とは何であるかを明らかにすることにつながる。

以下ではまず、自己意識の基本的特徴、およびその対象としての生と欲望についてみていく (1.)。次に、自己意識の自己保存のはたらき、および別の自己意識との関係や承認のはたらきについてみていく (2.)。最後に、自己意識の本質としての「精神」および基盤としての「人倫」についてみていく (3.)。

### 1. 生けるものと自己意識——欲望と自ら自身への反省——

〈私は私である〉ということは、ひとがおよそ人間であるかぎり、誰にでも備わっているようなきわめて基本的なことである。だが注意すべきことに、そのことははじめからそうであるというのではなく、そこへと振り返って立ち返るようにしてはじめて、実際にそのようになる、という性格のものである。このようにみるならば、自己意識は「反省 (die Reflexion)」(GW9, 104) のかたちをとることが分かる。『精神現象学』の叙述の文脈からすれば、自己意識の成立に関わる「反省」は、同書の先行する箇所が登場する「感覚的世界と知覚された世界の存在 (das Sein aus dem sinnlichen und wahrgenommenen Welt)」(ibid) から自ら自身への立ち返りであるとされる。感覚的なものと知覚されたものはいずれも、自己意識を取り巻くさまざまなものを指す。これらは自己意識の外側にあり、外的なものであると特徴付けられる。ひとは何かを感覚したり、知覚する限り、自ら自身とは別の何かに向かっている。〈私は私である〉ということは、このように外的なものへと向かっていたあり方から自ら自身へと向き返り、立ち返ることを意味する<sup>(1)</sup>。自己意識を「他であることからの還帰 (die Rückkehr aus dem Andersein)」(ibid) であるとするヘーゲルの言明はこうした事態を言い表す。

このことを踏まえるならば、自己意識は、〈私は私である〉というように、ひとが自

ら自身であるというそのあり方を意味すると同時に、そのようなあり方そのものが立ち返りという活動性を含むものであることが分かる。そのことについてはヘーゲル自身、「自己意識は自己意識である限りにおいて、運動 (Bewegung) である」(GW9, 104) と述べる通りである。注目すべきことに、こうしたことのうちには区別が含まれる。すなわち〈私は私である〉という場合、自分が自分に向き合う、という事態が生じており、自己意識はそれ自身から区別されるのである。自己意識はこのようにして、自己関係のかたちをとる。

〈私〉が自ら自身へと振り返る際、〈私〉は何かを欠いており、欠けているものを必要としていて、それを自分のものにしようとする。ヘーゲルは自己意識のこうしたあり方のうちに、「欲望 (die Begierde)」という要素がきわめて重要な役割を果たすことを指摘する。〈私〉は自己関係的である限り、自分で自分を区別する。ただし区別するといっても、そのことによって〈私〉が〈私〉であるのではなくって別のものになる、というのではない。むしろ区別を貫くようにして、〈私〉は〈私〉であり続けるのであって、同じ一つの〈私〉であることに変わりはない。〈私〉にみられるこのようなあり方は、「自己意識の自ら自身との統一 (die Einheit des Selbstbewusstseins mit sich selbst)」(GW9, 104) と特徴付けられる。こうしたあり方は、はじめから十全な仕方で自分のものとなっているのではなく、むしろヘーゲルによれば、「自己意識の自ら自身との統一は、自己意識にとって本質的となるのでなければならず、ということはすなわち、自己意識とは欲望一般 (Begierde überhaupt) なのである」(ibid) というのである<sup>(2)</sup>。

このようにして欲望が自己意識の根本特徴をなす場合、自己意識が二重の方向に向かうことに注目する必要がある。すなわち自己意識が欲望する場合、同じ一つの〈私〉であり続けようとするというようにして、自ら自身へと向かうとともに、そのために必要なものを補うために、自らの外部にあるものへと向かうのでもある。ヘーゲルは欲望が「二重の対象」(GW9, 104) をもつことを指摘し、『精神現象学』の先行する箇所が登場する「感覚的確信 (die sinnliche Gewissheit) と知覚のはたらき (das Wahrnehmen) の対象」(ibid) をも含み込むものであると述べる。

注意すべきことに、自己意識だけが反省のはたらきを行うのではない。のみならず、その対象も同じように反省のはたらきを行う。そのようなものとしてみた場合、自己意識の対象は「生 (das Leben)」(ibid) と特徴付けられる。自己意識は、同じように反省のはたらきを行うところの、生きたものを対象とする、というのである。果たしてこの

ことがどのような意味をもつのか、ということがまさに問われる。さしあたり、自己意識は自分だけが自立的であるとみなす。だが対象に関わり、それを自らのものにしようとする中で、実は対象も同じように自立的であることを経験する。「意識が自立的であるのとまさしく同じように、意識の対象も自体的には (an sich) 自立的である」(GW9, 105) とヘーゲルが述べる場合、「自体的には」という言葉を見落としてはならない。自己意識にとっては、対象は欲望するという仕方ですべてに対して関係するのであって、あくまでも自分にとって必要なものというかたちで存在すると映っている。そのため、対象は「否定的なもの (das Negative) という性格」(ibid) を帯びている。だが自己意識は、対象が自立的であることを認めることを通じて、かえって自ら自身が自立的であることを確証するに至る。生きたものが生きたものを対象とするということは、「対象の自立性の経験 (die Erfahrung)」(ibid) へとつながるのであり、そこから翻って、自ら自身も同じように自立的であることを自覚するのである。

自己意識について〈私は私である〉という場合、そこでいう「存在 (das Sein)」の意味に注意する必要がある。すなわち『精神現象学』の先行する箇所と比べて、存在の意味が新たにとらえ返されるに至る。「存在は、存在という抽象 (die Abstraktion des Seins) の意味をもつのではもはやなく、存在という抽象の純粋な本質性は、普遍性という抽象 (die Abstraktion der Allgemeinheit) の意味をもつのではもはやない」(GW9, 105) という場合、「抽象」としての「存在」は、「感覚的確信」章での対象としての〈このもの〉を指すのに対し、「普遍性」は「知覚」章での〈物〉やその諸性質を指す。これに対し、自己意識にとって存在ということが意味するは、「それ自身における純粋な運動という上述の単純で流動的な実体 (jene einfache flüssige Substanz der reinen Bewegung in sich selbst)」(ibid) であるとされる。自己意識は生きたものであり、さまざまな活動を行うが、そのような生き生きとしたあり方や活動性は、その一切が「単純で流動的な実体」に根差した上ではじめて可能となる。この場合、実体は流動性をその特徴としており、そのような流動性においてさまざまなものが一定のかたちをとって存在するようになる。以下では、自己意識が流動的な実体に立脚した上でどのように活動的であるか、ということについてみていくことにしよう。

## 2. 自己意識は自己意識に向き合う——流動化と自己保存——

自己意識の対象であるところの「生」は、さまざまな「形態 (die Gestalt)」(GW9,

105) をとる。形態は、特定のかたちやあり方に固定化されているのではなく、むしろ自己意識と同じく、「単純で流動的な実体」に根差しており、そのことにより絶えざる流動性のうちにある。そうであるからこそ、自己意識は生きたものを自らのものとして獲得することが可能となる。自己意識はそのようにすることで、自らの存在を保とうとする。

このようにみるならば、「自己保存 (die Selbsterhaltung)」ということが自己意識の基本をなすことが分かる。「自己保存」については、『精神現象学』に先立って講義草稿として書かれた『体系構想Ⅱ (Jenaer Systementwürfe II)』「形而上学」の「B. 客観性の形而上学 (Metaphysik er Objektivität)」章で論じられている<sup>(3)</sup>。欲望を満たすことで自らの生を保とうとするという、『精神現象学』における自己意識の特徴づけは、『体系構想Ⅱ』における議論を踏まえたものであるといえよう<sup>(4)</sup>。実際、「普遍的なものを犠牲にすることで自ら自身を保つとともに、自ら自身との自らの統一性を自ら自身に与えるところの個体 (die auf Kosten des Allgemeinen sich erhaltende, und das Gefühl ihrer Einheit mit sich selbst sich gebende Individualität)」(GW9, 106) というように、個体としてのあり方の根本に自己保存のはたらきがあることが明確に述べられている。

自己意識は絶えざる流動性のうちにあつて、自己保存しようとするのであつて、その限りにおいて、その存立は解消の可能性に常にさらされている。だがかえってまさにそのことによって、自己意識は新たな存立の仕方をするのが可能になるのでもある。そのことについては、「個体的な存立を止揚すること (das Aufheben des individuellen Bestehens) は同様に、個体的な存立を産み出すこと (das Erzeugen desselben) でもある」(ibid) と述べられる通りである。自己意識が個体というかたちで存在することは、他のものから切り離されてそれだけ単独で存在することを意味するのではない。かえって、自己意識は個体である限りにおいて自らの生を保とうとするが、その生は当の自己意識にとってのものだけであるのではなく、普遍的なものとして理解されるのである。「個体的な形態の本質 (das Wesen der individuellen Gestalt) とは普遍的な生 (das allgemeine Leben) である」(ibid) というヘーゲルの言明は、こうした意味において受け取られよう<sup>(5)</sup>。

生は常に一定の「形態」をとるのであつて、自己意識の自己保存の過程のうちにあつてさまざまな「形態」が成立しては解消するが、これらの「形態」は一つの連なりをかたちづくる。「普遍的な生」は、こうした連なりを貫いて存在しながら展開する。「普遍

的で流動的な媒体における生 (das Leben in dem allgemeinen flüssigen Medium), [すなわち] 諸形態が静止的に分かれてあること (ein ruhiges Auseinanderlegen der Gestalten) は、まさにそのことにより、諸形態の運動となるのであり、言い換えると、過程 (Prozess) としての生となる」(GW9, 106)。ヘーゲルによれば、このような運動や過程のうちにおいて、生は「円環」を描くようにして存在するとされる。生は諸形態を展開するだけでも、またこれらの形態を解消するだけでもなお不十分であって、そのような運動において同じ一つのそれ自身へと立ち返って来る必要がある、というのである。少し長くなるが、生が描く「円環」について述べられた箇所をここに挙げてみよう。

「こうした円環全体 (dieser ganze Kreislauf) が生をかたちづくるのであって、さしあたり言明されたもの、[すなわち] 生の本質の直接的な連続性と堅牢さ (die unmittelbare Kontinuität und Gediegenheit seines Wesen) がそうであるのでもなければ、存立する形態 (die bestehende Gestalt) やそれだけで存在するような離散したもの (das für sich seiende Diskrete) がそうであるのでもなく、存立する形態の純粹な過程がそうであるのでもなく、またこれらの契機を単純にまとめてとらえるはたらき (das einfache Zusammenfassen dieser Momente) がそうであるのでもなく、むしろ、それ自身を展開するとともにそれ自身の展開を解消して、なおかつこうした運動においてそれ自身を単純に保つような全体 (das sich entwickelnde, und seine Entwicklung auflösende und in dieser Bewegung sich einfach erhaltende Ganze) がそうである」(GW9, 107)。

これによれば、生は円環を描きながら一つの「全体」をかたちづくるのであり、なおかつ、こうした「全体」そのものが自己保存を行うとされる。展開とその解消を貫いて単純であり続けるという、一つの「全体」としての生のあり方は、前節で確認したような、自己意識における〈私は私である〉という場合の存在が意味するところの、実体をまさに指し示している。自己意識の自己保存は、まさにこのような実体としての生に立脚するのであり、だからこそ、生は「普遍的な生」なのである。

生は自己意識に対して存在する。その限り、生は自己意識にとっての対象である。だが〈物〉の場合とは異なり、生は対象的なものであるだけにとどまらない。そうではなくて、生はもう一つの別の生に対して存在する。いわば生は生に向き合うのである。こ

のようにして、生は「単純な類 (die einfache Gattung)」(GW9, 107) として理解される。だが生そのものは、それ自身を類としてとらえることがない。生に向かい合い、同じものが同じ物に向き合うというようにして、自らが類のもとにあることをとらえるのは、もう一つの別の生としての自己意識である。この場合、自己意識が自らのことをどのようにとらえるべきであるかについて、ヘーゲルは次のように述べる。

「そのものとしての類 (die Gattung als solche) は別の生に対して存在するのであり、また別の生はそれ自身そのものに対して (für sich selbst) 類であり、[すなわち] 自己意識であるのだが、こうした別の生はさしあたり、このように単純な本質 (dieses einfache Wesen) として存在するにすぎず、また純粋な自我 (reines Ich) というかたちで自ら自身を対象としてもつ」(ibid)。

生に向き合うところの、もう一つの別の生としての自己意識は、それ自身にとって類というかたちで存在するのであって、自らのことを類であるのだと自覚する。その際、自己意識は自らが現実に存在する通りのあり方をとらえるのではなく、むしろ現実のあり方の根底にあるものをとらえる。そのようなもののことがここでは、「純粋な自我」と特徴付けられている<sup>6)</sup>。自己意識の対象としての「純粋な自我」のうちには、否定が重要な役割を果たす。すなわち「純粋な自我」は、形態化されたものや自立的なものをそのままにしておくのではなく、むしろ解消する役割を果たす。しかもこの場合の解消は、対象とそれに向き合うものが実は別々のものどうしであるのではなく、むしろ自我という同じものが同じものに向き合う、というようにしてである。

「単純な自我 (das einfache Ich) はこうした類であり、言い換えると、単純であるような普遍的なもの (das einfache Allgemeine) なのであって、単純であるような普遍的なものにとっては、諸区別はいかなる区別であるのでもないが、そうであるのはひとえに、単純であるような普遍的なものが形態化されて自立的な諸契機の否定的な本質 (negatives Wesen der gestalteten selbstständigen Momente) であることによる。また自己意識はこのことにより、自立的な生 (selbstständiges Leben) として自己意識に示されるような、こうした他なるものを止揚することによって自ら自身を確信する。自己意識とは欲望なのである」(GW9, 107)。

ここで注目すべきなのは、自己意識の対象としての「純粋な自我」にみられる否定が欲望と関連付けられていることである。それによれば、自己意識は形態化されて自立的なものとしてそこにあるものをそのままにしておくのではなく、かえってそれを自分のものとして獲得しようとする。このことを踏まえるならば、『精神現象学』における自己意識の特徴付けが非常に独特なものであることが分かる。すなわち自己意識は、単純な自己関係であるのではなく、むしろ対象を獲得することを通じて、対象が実は自らと同じく「単純な自我」という類に属することを認める、というかたちをとるのである。〈私は私である〉ということは、このように欲望を介して成り立つ<sup>(7)</sup>。

自己意識の欲望の対象は自立的であるが、自己意識は自らの欲望を満たすことによってこそ、まさにそのことを経験する。対象の存在は、自己意識にとって不可欠である。欲望の対象は、自己意識が満足することによって根絶されるのではない。むしろ自己意識はそれ自身生けるものである限り、自らの生を保つために常に新たに対象に関係する必要がある。「自己意識は対象をむしろまたもや産み出すのであり、同様にして、欲望をまたもや産み出す」(GW9, 107) というヘーゲルの言明は、こうした意味において理解される。〈私は私である〉ということは、新たな対象へと向かい、関係するように指し示すのである。その際注意すべきことに、自己意識は単なる〈物〉において満足を得るのではない。そうではなくて、もう一つの別の自己意識においてこそ、自己意識は満足を得る。だからこそ、生きたものが生きたものに向かい合うといえる。

以上にみるように、『精神現象学』においては、自己意識はそれだけで単独で存在するのではなく、むしろ二重化されたものとして存在する。そのことについては、「自己意識の自ら自身への反省の真理はむしろ、二重化された反省 (die gedoppelte Reflexion) であり、自己意識の二重化 (die Verdopplung des Selbstbewusstseins) である」(GW9, 108) とヘーゲル自身明確に述べる通りである。自己意識は、もう一つの別の自己意識に向き合うことによってこそ、自らが何であるかを自覚するようになる。自己意識は別のものに関係するとしても、実際には別のものが自らと同じく、「単純な自我」という類に属しているのを知るのであって、自ら自身と同じものであることを見て取る。こうした事態について、ヘーゲルは次のように言い表す。「自己意識は自己意識に対して存在する。このことを通じてはじめて、自己意識は実際に存在する。というのもこうしたことのうちにはじめて、他であるそのあり方における自ら自身の統一 (die Einheit



seiner selbst in seinem Anderssein) が自己意識にとって生じるからである」(ibid)。このように、自己意識は「他であるそのあり方」において他ならぬそれ自身として存在するのである。

こうしたことのうちに、ヘーゲルは「精神の概念 (der Begriff des Geistes)」(GW9, 108) が登場するのを見届ける。自己意識は自らの生を保とうとしてそのために必要なものに関わる中で、自らがそれであるのと同じ類に属するものに出会う。「私たちであるところの私、および私であるところの私たち (Ich, das Wir, und Wir, das Ich ist)」(ibid) という表現は、こうした意味において理解される。このようにみるならば、「精神」は、それぞれの自己意識が〈私は私である〉というようにして存在することの本質としての役割と果たすといえる。「精神」が「こうした絶対的な実体(diese absolute Substanz)」(ibid) と特徴付けられるのは、まさにこうした文脈においてである。

1805年から翌年にかけて執筆されたと推定される講義草稿である、『体系構想 III (Jenaer Systementwürfe III)』の「精神哲学」の中では、「精神とは、諸個人の本性 (die Natur der Individuen) であり、諸個人の直接的な実体 (ihre unmittelbare Substanz) であるとともに、諸個人の運動および必然性 (deren Bewegung und Notwendigkeit) である」(GW8, 254) と述べられており、「精神」がそれぞれの個人の実体をなすことがすでに明確に述べられている。『精神現象学』における自己意識と「精神」の間をめぐる理解は、こうした線を踏まえたものである。ただし、「精神」が自己意識の本質をなすということについては、「自ら自身の確信の真理」章ではその萌芽が示されるにとどまる。以下では、自己意識をめぐるこうした理解が『精神現象学』の続きの章である「理性の確信と真理」章でどのように展開されるかについてみていこう。

### 3. 〈私は私である〉ことは人倫に根差すことで可能となる

みてきたように、『精神現象学』において特徴的であるのは、自己意識が二重化されていることである。ここでいう二重化が意味するのは、〈私は私である〉というように、一つの自己意識における自己関係であるのではなく、むしろ自己意識と自己意識の関係ということである。それぞれの自己意識が本当の意味で〈私は私である〉のは、「精神」においてなのである。「理性の確信と真理」章の「B. 理性的な自己意識の自ら自身による実現 (Die Verwirklichung der vernünftigen Selbstbewusstseins durch sich selbst)」節では、「精神こそが確信をもつのであって、その確信とは、その自己意識の二重化において、

かつ両方の自己意識の自立性において自ら自身との自らの統一（*seine Einget mit sich selbst*）をもつ、というものである」（GW9, 192）というようにして、「自ら自身の確信の真理」章での議論が振り返られている。それによれば、二重化された自己意識どうしの関係において、これらの自己意識を包括するのは「精神」であり、なおかつ、「精神」はあくまでも他ならぬ自ら自身との統一を保つとされる。

自己意識はこのようにして「精神」のうちに根差す限りにおいて、「承認された自己意識（*das anerkannte Selbstbewusstsein*）」（GW9, 194）と特徴付けられる。この場合、それぞれの自己意識はもう一方の自己意識のうちに自らの本質を知るのであり、そこから振り返るようにして自らが何であるかを確信する<sup>(8)</sup>。このようなかたちでの自己意識は対象性を同時に備えており、そのことから真理としての性格が認められる。自己意識は他方の自己意識という対象のうちに、自らの反映を見出すようにして自己認識するのである。「認識のはたらきから承認のはたらきへ（*aus dem Erkennen in das Anerkennen*）」（GW7, 146）という『体系構想Ⅱ』「形而上学」の「客観性の形而上学」におけるヘーゲルの言明は、自己意識をめぐろうとした理解へと受け継がれている。『体系構想Ⅱ』においても、世界における客観的なものの認識から出発して「魂（*die Seele*）」どうしの承認へと至るのであり、さらにそこから進んで、「自我（*das Ich*）」の自己認識の段階にまで到達する。

ただし「承認された自己意識」というこうしたものは、あくまでも『精神現象学』全体の枠組みからすれば、「自ら自身の確信の真理」章および「理性の確信と真理」章ではなお目標にとどまるとされる。そのような目標の先に示されるのが「人倫の領域（*das Reich der Sittlichkeit*）」（GW9, 194）であるとされる。ヘーゲル自身の言明によれば、「人倫」とは、「諸個人の自立的な現実性における、諸個人の本質の絶対的で精神的な統一（*in der selbstständigen Wirklichkeit der Individuen die absolute geistige Einheit ihres Wesens*）」（*ibid*）と特徴付けられる。「人倫」は諸個人を統一する役割を果たすが、この場合の統一は、それぞれの個人が自立したものとして現実に存在することを可能にする、という根拠として理解される。その意味で、統一は「精神的」なものである、というわけである<sup>(9)</sup>。

注意すべきことに、「理性の確信と真理」章において「民族の生（*das Leben eines Volks*）」（GW9, 194）ということがすでに語られている。引き続き「VI. 精神」章では、「精神とは民族の人倫的な生（*das sittliche Leben eines Volks*）」である」（GW9, 239）という

ように精神について規定されるが、その萌芽がこの段階ですでに認められる。それぞれの自己意識は同じ一つの共同体に属するのであって、共同体そのものが一つの生けるものとして理解される、というのである。それぞれの個人は共同体という現実の世界のうちに立脚しつつ、そこにおいて見出すのは自ら自身に他ならない。それぞれの個人が共同体においては自ら自身を見出すのであって、しかもそのようにして互いが互いによって存在するという、こうしたあり方について、ヘーゲルは次のように述べる。

「それぞれの者は普遍的な精神（*der allgemeine Geist*）のうちにあって、自ら自身以外の何ものをも存在する現実性（*die seiende Wirklichkeit*）において見出すことがないという、自ら自身の確信をもつに他ならない。それぞれの者は自ら自身を確信するのと同じように、他の者たちを確信する。——私がそうであるように、他の者たちが自ら自身に対してはこのように自立的な本質に他ならないということ、私は全ての者たちのうちに直観する。私は他の者たちのうちに、他の者たちとの自由な統一（*die freie Einheit mit den andern*）を直観するが、そのことは、他の者たちが私によって存在するのと同じように、他の者たち自身によって存在する、というようにしてである。〔私は〕他の者たちのことを私として〔直観するのであり〕、私のことを他の者たちとして〔直観する〕」（GW9, 195。〔 〕は筆者による補足）。

それぞれの個人はこのようにして「自由な統一」のうちにあるのであって、それぞれに他の相手を通じて存在する。しかもそうであっても、それぞれの個人は自らの生を自らで担うのであり、自立したあり方や自発的な活動性は常に維持される。

自己意識が一つの個人として存在するのは、他の者たちとは区別されるような、その個人に特有な「規定（*die Bestimmung*）」をもつことによる<sup>(10)</sup>。「規定」はその個人のあり方を特徴付けるものであり、どのようにして自己保存の活動を展開するかを決定する。その意味で、一つの個人としての自己意識に特有な「規定」は、その個人の使命として理解される。その一方で、自己意識は他の自己意識と同じ一つの共同体に属することによってこそ、一つの個人として存在することが可能となるのであるから、それぞれの個人の「規定」は同時に普遍的な性格のものでもある。個人は共同体という現実の世界においてこそ、自らの使命を達成することが出来る。

「自由な民族（ein freies Volk）においてこそ、理性は真の意味で現実化されている。理性とは現前する生き生きとした精神（gegenwärtiger lebendiger Geist）なのであって、個人は現前する生き生きとした精神のうちにあつて、自らの規定を、すなわち自らの普遍的であるとともに個別的であるような本質（sein allgemeines und einzelnes Wesen）を語り出したのであるとともに物性（Dingheit）というかたちで現存するのを見出すだけでなく、むしろそれ自身こうした本質なのであって、なおかつ、自らの規定を達成したのもあった」（GW9, 195）。

とはいえ「理性の確信と真理」章の段階では、それぞれの個人に特有の使命はなお十分な仕方では達成されない。そのことについて同章では、「民族の生」がなお「偶運（das Glück）」に左右されるためであると述べられる。「民族の生」が「人倫的な生」（GW9, 239）なものである場合、それは「さまざまな習俗や法律の全体（das Ganze der Sitten und Gesetze）」（GW9, 196）のかたちをとる。それぞれの個人は、共同体の中で通用する習俗や法律などにしたがって行為するのであって、いかなる行為においてもこれらの習俗や法律は現実効力を有する。だがそれだけではなお不十分であつて、それぞれの個人が習俗や法律の本質を意識する、ということが不可欠である。習俗や法律がそれぞれの個人を貫くものである、ということが当の個人自身にとって明らかとなる必要があるのである。

このことを裏返していうならば、「民族の人倫的な生」としての「精神」の側からも同じことがいえる。そのことについてはヘーゲル自身、「精神はさしあたり、そのものとしてみた場合、それ自身を通じて実現されていない。精神は内的な本質（inneres Wesen）として定立されているにすぎず、言い換えると、抽象（die Abstraktion）として定立されているにすぎない」（ibid）と述べる通りである。「精神」は、それに根差すことで存在するような自己意識と同じく、自らが何であるかを自覚するのであり、かつ自らの生を自ら自身によって担うはずである。「精神」のこうしたあり方は、後続の「精神」章において達成されることになる。

それぞれの個人は、「人倫」が自らの本質をなすことを確信する。自らが行うべきであり、「さまざまな習俗や法律」のうちに示されるような、実現されるのが望ましいよい事柄や正しい事柄が確固として現実に存在するという、このことを個人は固く信じて動かない。「人倫」に対するそれぞれの個人のこのような態度のことを、ヘーゲル

は「人倫的な志操 (die sittliche Gesinnung)」(GW9, 236) と特徴付ける。よさや正しさがそれ自体で存在するということが、しかもそのことが他ならぬ〈私〉にとってそうであるということ、このことのうちに個人の確固とした態度が成り立つとされる<sup>(11)</sup>。

ただし注意すべきことに、自己意識は「人倫的実体の現実性と定在 (ihre [d.i. der sittlichen Substanz] Wirklichkeit und Dasein) であり、人倫的実体の〈自己〉と意志 (ihr Selbst und Willen) である」(GW9, 237) ことも見落としてはならない。自己意識の活動によってこそ、よいことや正しいことは現実に存在するようになるのであり、効力を有するものとして通用するようになる。また自己意識がそれを実現しようとして目的として掲げることによってこそ、よいことや正しいことは規範としての性格を獲得する。さらには、自己意識は「人倫」という規範に従うことによってこそ、同じ共同体に属する別の自己意識との関係において自らに固有の使命を見出し、独自のあり方をするようになる。その意味で、自己意識は「人倫的実体の〈自己〉」なのである。

だが〈自己〉としてのあり方は、自己意識だけに認められるのではない。のみならず、「精神」にも〈自己〉としてのあり方が備わっている。そのことについてはヘーゲル自身、「精神は現実的な意識の〈自己〉 (das Selbst des wirklichen Bewusstseins) である」(GW9, 238) と明確に述べる通りである。そもそもそれぞれの個人が何に基づいて行為するかということや、何を目指して行為するかということは、その一切が「精神」に帰着するということである。このようにみるならば、「人倫」としての「精神」は、根底であるとともに目的であるといえよう。ヘーゲル自身、「精神は、万人の行為の動かされることも解消されることもないような根底にして出発点 (der unverrückte und unaufgelöste Grund und Ausgangspunkt des Tuns Aller) であり、——かつ万人の目的にして目標 (ihr Zweck und Ziel) であるが、一切の自己意識の思考された自体的なもの (das gedachte Ansich aller Selbstbewusstsein) としてそうである」(GW9, 239) というように、こうした事態を表現する。

その一方で、「人倫」としての「精神」は同時に、「所産 (das Werk)」としても理解される。そのことは、「精神」が活動的なものとしてのそれぞれの個人の本質をなしており、個人が何らかの活動を行うことを成り立たせることによるのであって、「精神」は個人の活動の結果として現実に存在するようになるのである。そのことについて、ヘーゲル自身は次のように述べる。

「こうした実体は同様に、普遍的な所産（das allgemeine Werk）であるが、普遍的な所産は万人それぞれの行為（das Tun Aller und Jeder）を通じて、万人それぞれの統一および等しさ（ihre Einheit und Gleichheit）というかたちでそれ自身を産み出す。というのもこうした実体とは、それ自身に対する存在（das Fürsichsein）であり、〈自己〉であり、行為であるからである」（GW9, 239）

ここに挙げた文章では、ただ単にひとりひとりの個人の行為によって「普遍的な所産」が産み出されるとは述べられていない。そうではなくて、「普遍的な所産」はそのことを貫くようにして、それ自身を産み出すというのである。ヘーゲルのこうした理解は、「精神」そのもののうちに〈自己〉としてのあり方が認められるという、先にみたところにつながる。だからこそ「精神」は、〈私は私である〉というようにして自己意識が存在することを成り立たせるといえる。

## 結 び

以上に見てきたように、『精神現象学』においては自己意識に対してきわめて独自の特徴付けが与えられている。〈私は私である〉ということは、それぞれの個人の根本的なあり方を意味するものであると同時に、そのあり方自体が他の個人との関係を含み込んでいる。のみならず、そのような根本的なあり方を可能にする本質としての「人倫」に根差したものであるとされる。自己意識をめぐるヘーゲルのこうした理解は、近代ドイツ哲学における自己意識理論の系譜の中でもきわめて独自のものであるといえる。そのことは、カント『純粋理性批判』における純粹統覚としての自己意識の特徴付けや、フィヒテいやシェリングの超越論的観念論における自我の特徴付けとの比較においてのみならず、ヘーゲルのもう一つの主著である『大論理学』における「純粹な自己意識（das reine Selbstbewusstsein）」（GW11, 21）の思想との対比においてもやはりそうである<sup>(12)</sup>。ただしそうであってもやはり、それぞれの個人が自由で自立的であることはどのようにして可能であり、かつそうしたことがどのようにして揺るぎなく確かなものとされ得るのか、という問題意識に貫かれたものであることを見落としてはならない。そうであるからこそ、「真なるもの（das Wahre）を実体としてではなく、むしろまさしく同じように、主体（Subjekt）としてとらえるとともに表現すること」（GW9, 18）が必要であるとヘー

ゲル自身述べる必要があったはずであろう。「真なるもの」はあくまでも、〈私は私である〉ということが本来意味するところを問うために探求されるものなのである。

## 註

本稿で用いたヘーゲルのテキストは以下の通り。

G. W. F. Hegel, *Gesammelte Werke*, Hamburg 1968ff. (GW と略記)

GW7 : Jenaer Systementwürfe II

GW8 : Jenaer Systementwürfe III

GW9 : Phänomenologie des Geistes

GW11 : Wissenschaft der Logik. Erster Band. Die objektive Logik

- (1) 自己意識にとっての対象が意識にとっての対象とどのように異なるかという点については、以下の拙著を参照されたい。嶺岸佑亮、『自己意識の哲学——私が私であることとは——』、ミネルヴァ書房、二〇二三年十月、四三～四七頁。
- (2) 欲望をめぐるヘーゲルのこうした理解がカントやフィヒテをはじめとする、同時代の意識理論に対する批判として形成された点については以下を参照。Axel Honneth, *Das Ich im Wir. Studien zur Anerkennungstheorie*, Frankfurt a/M 2010, bes. S. 17-24.
- (3) vgl. GW7, 142-150, bes. 145ff.
- (4) この辺りについては以下の拙論を参照されたい。嶺岸佑亮、「自己保存するとは〈他なるもの〉に開かれていることである——〈イエーナ期ヘーゲルの形而上学〉——」、『Moralia』第30号、頁数未定、二〇二三年11月。
- (5) マルクスは、「生」の完全な実現は普遍的な自己意識のうちに求められると述べ、それぞれの自己意識はあくまでも、個体化された生けるものであるとする。Werner Marx, *Das Selbstbewusstsein in Hegels Phänomenologie des Geistes*, Frankfurt a/M 1986, S. 35-53, bes. S. 40.
- (6) クヴァンテは、ここでいう「自我」のことを自己関係の活動として解釈する。Michael Quante, *Die Wirklichkeit des Geistes. Studien zu Hegel*, Frankfurt a/M, 2011, S. 237-242, bes. 239.
- (7) この点に関して、ブランダムは自己意識のうちに承認されることを求める欲求があることを指摘する。Robert B. Brandom, *Selbstbewusstsein und Selbst-Konstitution. Die Struktur von Wünschen und Anerkennung*, in: *Hegels Erbe*, hrsg. v. Christoph Halbig, Michael Quante und Ludwig Siep, Frankfurt a/M 2004, S. 46-77, bes. 61-67.
- (8) イーバーは承認における他なるものに対する関係のことを、他なるものうちに自らを見出すことと他なるものからの距離との弁証法としてとらえる。Christian Iber, *Selbstbewußtsein und Anerkennung in Hegels Phänomenologie des Geistes*, in: *Hegels > Phänomenologie des Geistes < heute*, hrsg. v. Andreas Arndt u. Ernst Müller, Berlin 2004, S. 98-117, bes. 104-106.
- (9) デュージングは、それぞれの個人の自己意識が実体との関係でどのようにして自己知を獲得するか、ということについて以下の論考で論じている。Klaus Düsing, *Der Begriff der Vernunft in Hegels Phänomenologie*, in: *G. W. F. Hegel. Phänomenologie des Geistes*, hrsg. v. Dietmar Köhler u. Otto Pöggeler, 2. bearbeitete Aufl., Berlin 2006, S. 145-164, bes. 157f.
- (10) 『精神現象学』全体の枠組みにおける自己意識と個人それぞれの特徴と区別については以下を参照。Marco Aurélio Werle, *Literatur und Individualität. Zur Verwirklichung des Selbstbewußtseins durch sich selbst*, in: *Hegels Phänomenologie des Geistes. Ein kooperativer Kommentar zu einem Schlüsselwerk der*

(122) 自己意識と生——ヘーゲル『精神現象学』における精神の基礎をめぐって——（嶺岸）

Moderne, hrsg. v. Klaus Vieweg und Wolfgang Welsch, Frankfurt a/M 2008, S. 350-368, bes. 352ff.

- (11) それぞれの個人のこうした態度が「教養形成 (die Bildung)」によって成り立つという側面については、以下の論考が『精神現象学』における道徳的自己意識の問題として論じている。Michael Wladika, Im Land des moralischen Bewusstseins enthaltene durchgeführte Bildung, in: *Wissen und Bildung. Zur Aktualität von Hegels Phänomenologie des Geistes* anlässlich ihres 200jährigen Jubiläums, hrsg. v. Thomas Auinger/Friedrich Grimmlinger, Frankfurt a/M 2007, S. 209-226, bes. S. 212-216.
- (12) 『大論理学』における「純粹な自己意識」の特徴については、以下の拙論で概念の自己実現との関連で論じたのでそちらを参照されたい。嶺岸佑亮, 「純粹な自己意識の学としてのヘーゲル論理学」, 『実存思想論集』第XXX号, 二〇一五年六月, 一二三~一四〇頁, 特に一三三頁以下。

\* 本研究は独立行政法人日本学術振興会の科研費若手研究（課題番号：22K12955, 研究代表者：嶺岸佑亮）の助成を受けたものである。



Selbstbewusstsein und Leben  
—— Über die Grundlage des Geistes in Hegels *Phänomenologie des Geistes* ——

MINEGISHI Yusuke

Das Selbstbewusstsein ist eines der wichtigsten Themen in der neuzeitlichen Philosophie. Hegels Theorie des Selbstbewusstsein in der *Phänomenologie des Geistes* ist wegen ihrer eigentümlichen Behandlungsart von großer Wichtigkeit. Das Selbstbewusstsein bedeutet, dass Ich Ich bin. Dies wird von den meisten Philosophen als der Selbstbezug des Ich auf sich selber interpretiert. Dagegen behauptet Hegel, dass der Selbstbezug die Beziehung auf ein anderes Ich in sich schliesse. Anders als das Bewusstsein, welches den äußeren Gegenstand in der Welt erfasst, geht das Selbstbewusstsein zu sich selbst zurück. Dabei hat sein Gegenstand einen gedoppelten Charakter. Nämlich zielt das Selbstbewusstsein daraufhin, den äußeren Gegenstand sich eigen zu machen. Diese Verhaltensart des Selbstbewusstseins lässt sich als die Begierde bezeichnen. Durch die Befriedigung der Begierde trachtet das Selbstbewusstsein danach, sein Leben zu erhalten. Dabei wird klar, dass ebenso sein Gegenstand den Charakter des Lebens hat. So kann man sagen, dass das Lebendige dem Lebendigen gegenübersteht. Diese Sachlage deutet Hegel als das gegenseitige Anerkennen beider Selbstbewusstsein. In diesem beiderseitigen Anerkennungsprozess wird der Begriff des Geistes hervor. So lässt es sich sagen, dass der Geist das Wesen der Selbstbewusstsein ausmacht. In diesem Aufsatz wird diese Sachlage genauer erörtert werden.